平成 28 年用「技能と技術」誌 表紙デザイン最優秀賞受賞インタビュー

「技能と技術」誌 編集事務局

1. はじめに

神奈川県に縁のある人に「二俣川といえば？」と問うてみると、その答えの多くは「運転免許試験場」となるでしょう。12月某日、本誌編集事務局はその二俣川を訪れました。

本誌では、全国の職業訓練施設のデザイン系学科からデザイン画をご応募いただき、その中の最優秀作品を翌年の表紙デザインとして採用しています。

平成28年の表紙を飾るのは神奈川県立産業技術短期大学校 産業デザイン科2年生の井口まりんさんの作品です。

本誌編集事務局は、運転免許試験場の隣に位置する同校を訪問し、授賞式と受賞者インタビューを行いましたので報告します。

2. 神奈川県立産業技術短期大学校 産業デザイン科

同校は、新しい時代に柔軟に対応できる実践技術者の育成を教育目標に掲げ、県立の短期大学校として平成7年に設立されました。「生産技術科」「制御技術科」「電子技術科」「産業デザイン科」「情報技術科」の5学科があり、平成27年3月卒業生では全体で97.9%の高い就職実績を残されています。

産業デザイン科では「グラフィックデザイン」「プロダクトデザイン」「スペースデザイン」の3つの分野について、それぞれのデザイン技術を身につけることを目標としています。しなやかな感性と美的感覚を持ち、現代社会に活用される製品を生み出すことのできる技能・技術を学ぶことができます。

訪問した時間帯では、1年生がデッサンの実習中で、2年生は卒業制作に取り組んでいました。1年生が集中力を高めながら、真剣な眼差しでスポーツシューズのデッサンをしている一方で、2年生は思い思いの課題に取り組む中、自分のテーマについて楽しそうに語ってくれた姿が対照的であったことが強く印象に残りました。

デッサンの実習風景

3. 受賞インタビュー

今回、同校からは最優秀賞をはじめとして佳作が2作品の合計3作品が入賞されました。応接室で受賞者のみなさんをご紹介いただいた後、ささやかな授賞式を行い、受賞インタビューに答えていただきました。ここでは最優秀賞を受賞された井口さんのインタビューをご紹介します。緊張しながらも一生懸命にお話しいただきました。

左より齋藤先生、荻田校長、最優秀賞の井口さん、佳作の上野さん、井上さん

―まずは受賞おめでとうございます。最優秀賞と聞いてどんな気持ちでしたか？

とにかくびっくりして、本当なのかと信じられませんでした。「やったー!!」という気持ちもありながら、今日まで誰かと間違っているんじゃないかと先生に何度も確認してしまいました。

一生懸命取り組んだ作品でこのようなすばらしい賞をいただけたことを大変にうれしく思っています。

―どのような過程で作品が完成したのですか？

勢いとスピード感を出したいと思っていたので、それは常に心がけて制作を行いました。最初はとにかくいろんなラフスケッチをたくさん描きました。

その中から候補をだんだんと絞っていくことで、このデザインに決まりました。

―制作期間は？どこに時間がかかりましたか？

1コマ1時間半の実習を6コマくらいで制作しました。実習だけでは時間が足りなかったので、放課後等でもがんばりました。

苦労したのは手描きスケッチを描画ソフトでデータ化する際に、なかなか思いどおりにいかなかったことです。また、作品はモノクロですが、濃淡の調整が難しく、試行錯誤を繰り返すことで作品として仕上がっていきました。

―ご家族には報告しましたか？

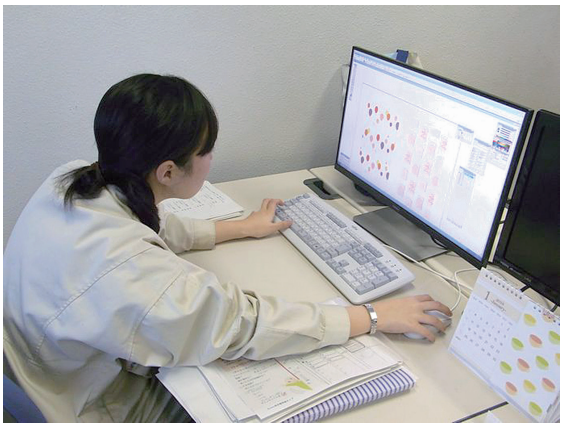
もちろん報告しました。とても喜んでくれました。

先生もすごく喜んでくださってうれしかったです。何もわからないところから、ここまで指導してくださった先生方に感謝をしています。

―それでは産業デザイン科の良いところを教えてください。

先生がすごくマメに声をかけてくれるんです。先生と生徒の距離が近い感じですね。入学前からその評判は聞いていましたが本当でした。

課題の量がすごく多くて大変なのですが、その分、得られるものも多いんだなと思っています。



卒業制作の卓上カレンダー制作に励む井口さん

―今後の展望をお聞かせください。

印刷関係の企業に就職が決まりました。まずはデザインと直接は関係のない部署への配属ですが、デザインの部署もあるので、経験を積んでいずれはそちらの道に進みたいと思っています。

この学校で美術とデザインの違いを学びました。自己満足でなく、人に伝えたい情報が伝わることがデザインに重要なことだと理解しています。これからも人に伝わるデザインを作っていきたいです。

―最後に、今後エントリーしようとされる皆さんにコメントをお願いします。

私も最初は「技能と技術」誌の表紙デザインとはどういうものか全く見当がつきませんでした。過去の作品を見てみるなど、ほかの人のやっているものを見てみると刺激になります。いろいろな作品を見ると参考になると思います。